

その後湯の沢開拓団の人も見に来て、建てる人もおりました、住宅は四十七年に建て直したが生舎は今でも使っています。馬と牛を一頭づつ貸付けを受けて牛乳も二年後に出荷できるようになり、食べるものも大部楽になって来ました。

胆振馬鈴薯原種農場でも開墾が始まったので、黒畑さんや城畑さん兄弟達と一緒に抜根作業に五キロも離れた所まで裸足で通い、作業の時だけ地下足袋をはく状態で、少しづつ造った畑にイナキビ、ライ麦を作り主食に当てました。

四、五年後と思いますが、父が引揚げるとき川のありとところと言っていたので山奥であったが川の近くで五十アールの水田を造り直蒔きでしたが小西指導員の指導の下に、一アール当り四俵程の収穫ができました。

その後も造田を繰返し、又離農された土地を買い、息子も後を継いでくれ内孫も五人となり、妹や弟も結婚させ、父母は亡くなりましたが現在家族九人で楽しく農業をやっております、引揚後の労苦は並々ならぬものであったことを後世に語り継ぐものであります。

義父のお蔭で命拾い

北海道 北村 ユキ

私は八月九日ソ連軍が侵攻して来た時は、珍内の山奥四十キロくらいの小さな村に住んでおり夫は王子製紙の林務部に勤め、山の木材の買付の係で、何の不由なく暮していました。日本軍の命により、女子供、老人は直ちに避難し南下せよとのことで夫と別れ、夫の父と作八十六歳と二人で馬車を雇い、腰椎麻酔による歩行困難の父を乗せ、少量の衣類と現金を持ち南下避難を始めた。

途中幼い子供達を大勢乗せ遠足気分でしたところ、突然ソ連の飛行機が飛来し機銃掃射を始め、子供達を林の中に逃し、私は六十二キロの父を背負い林の中に逃げる途中、弾が身近なところを掠めること四、五度、父をおろして、私がおの上に覆い被さり、自分はどうなっても父だけは助けなければと、夫より預かったこ

とのみ心によぎり、神佛の加護を念じておりました。その後は昼間は林に隠れ、夜移動したが照明弾で昼より明るく、繰り返し々々の攻撃にやっとの思いで珍内の町に五昼夜くらいか、つてたどり着きました。

その道すがら、子供を両手に背に大きな風呂敷を背負って歩いている人が、丁度蟻の行列のように続いていたが、重さに耐えられずに、一ツ、又一ツ、仕舞には先祖の位牌迄も一緒にして道路の両側に山となつて、捨てられ、又乳飲み子が乳も与えられずに死んで捨てられ、年寄や子供は両親とはぐれて、呼び合う声、その悲惨な姿をあれから四十有余年の今でも、夢を見て涙しております。

珍内に着いて、大きな倉庫が、避難民に開放されて、そこに起居して毎日内地行きか、真岡行きの船待ちをしておりました、その内に真岡が艦砲射撃を受け、これでは密航船で、稚内に行くしかない、何隻かが船出しましたが、もうこの船が最後だと（九月上旬頃）義父を背負い波止場迄の崖道をよう／＼の思いで下り、船主に金を渡して、乗船しようとした時、「そんな死

に損いの爺など乗せないで、若い者を一人でも多く乗せろ」とあちこちから声がかゝり、父一人残して私一人が内地にどうして帰られましようか。

この父を守るのは私一人と思い、いま来た道をトボ／＼心に涙を流し、顔では笑顔を作つて、後を振り向き振り向き帰る道のりの遠いこと。

幸いと言つて良いのか、亡くなつた方々には真にお気の毒ですが、その後、時化を無理して出港したのと、途中で潜水艦にやられたのか、沈んだと四、五日後聞き、今更ながら、あの時に父を捨て、乗船していたらと、身の毛のよだつ思いがしてなりません。

生死は紙一重とは、このことでしょうか。

其の後、治安も治まり避難民は元の地に復帰するように命令がソ連より出ましたが、久春内に実家の父母（吉田七郎、イヨ）がおり、やつと連絡が取れて、馬車で迎えに来てくれて、珍内の山奥よりは良いだろうと云つて、皆で吉田の実家にお世話になることになった。

その内に夫も実家迄尋ねて来て一同無事を祝いましたが、ソ連のこととて働かざるものは食うべからずで、

煉瓦工場で毎日働くようになり、今迄力仕事などしたことのない身に、モッコ担ぎ等辛い日々を過しました。

幸にも食パンの配給は私達だけは白パンでした。これはゲーペーウの将校が夫婦で二階を接収していたので寛大な処置をしてくれたのだと思ひ感謝していました。

夫と二人で二十有余年社宅暮しだったが、家具や特に寒いので夜具には金をかけて作り置いたのを置いて命からがら逃げ、夢にまで見続けて来た日本の土を昭和二十二年七月十七日函館に上陸、税関で兎の毛皮でチョッキでもつくろうとしてこれ一枚しか持って来なかつたのに、無情にも取り上げられた。

義父のお蔭で助かつたので、帰る時は一緒にと励まし合つたが、病に勝てず引揚げる前二十一年三月一日樺太の土と成り、一握りの骨のみ、今、夫（平成元年四月五日没）と二人ともども藻岩山に埋葬し私を見守つていてくれます。

母の教え、情けは人の為ならず

北海道 中嶋 富美

私は昭和二十年四月、樺太泊居女学校に入学し親元を離れ下宿をして学校に通っていた。

昭和二十年八月、ソ連軍の突然の侵攻で全員親元に帰ることとなった。

久春内は西海岸の終着駅で、避難して南下して来る人、肉親の安否を気遣って北上する人、喧騒騒然、蜂の巣を突いたような騒ぎであった。

空襲のサイレンで、久春内郵便局に勤めていた姉と私と兄の長男七歳と、防空壕に逃げ込んだ、あとから母がオニギリを持って来てくれたが、とう／＼空襲解除にならず一夜を明かした。

翌日恐る々々家に戻って見ると、三十人余りの避難して来た人達が朝食を作って食べていた、風呂に入っている人もいた。